
僕は、君を_____

夏生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕は、君を――

【Nコード】

N9778C

【作者名】

夏生

【あらすじ】

淡くほろ苦い恋愛を、青年視点で描いた話。 真っ直ぐに、純粹に……ただ君を愛した。

最期の恋文（前書き）

前に執筆していて完結したものを、再び書き直したものです^^

最期の恋文

紫苑へ。

先輩、どうですか？ 今日の調子は！
あたしはですねー、とっても元気です。

先輩と一緒に居れたこの期間、本当に幸せでした。
突然、何なんだと思うかもしれないかもしれませんが、黙って読んでください。

……本当ですよ？ 多分（笑）
なんか、もうすぐ自分が死ぬって分かるとすごく、死つていうのを近くに感じて、怖いものなんです。明日が来ないかもしれない恐怖に、いつも震えてました。

一つ言いたい事が、あります。
先輩なんか、大嫌いなんです！ほんとに、ほんとに大嫌いなんです。
何考えてるかわかんないし、無愛想だし、あんまり好きとか言ってくれないし。

……もう、最悪です。そんな先輩だったら、絶対、もう彼女出来ませんからねー。あたしが最後の彼女だったりして……（笑）

でも、先輩。
そんなところが先輩の魅力だと思うんですよ、あたし。今、矛盾してると思うたでしょ。

ま、世の中色々ですね。
そんな、最低男を好きになる物好きもきつと、居るんです。
……あたしとか？（笑）

ずっと一緒に居たかったです。

二人で同じ未来を見て、感じて、笑って居たかったです。

これ、読んだら捨ててくださいね？　じゃないと、呪いますよ？

先輩のこと！

今まで本当に、有難う。

口で言うのはあまりに、恥ずかしかったんで手紙にすることを許してください。

……先輩の心に少しでも、あたしの存在が優しく残りますように。

木下 美樹

心の穴（前書き）

本編の始まりです。

心の穴

*

「何、見てんだよ……」

火をつける前の煙草を片手に、ポケットに左手を突っ込んで、ライターを探す。自分が思っていたよりも大分低い声が出て、少しだけ驚いた。

最近は無償に腹が立つことが多くて、僕を真っ直ぐに見つめている目の前に居る少女にさえ、腹が立った。歳を重ねるにつれ、短気になっていくのかもしれない。ただ、カルシウム不足なだけか……。

少女は僕の低い声に怯むこと無く、僕に向かって微笑みかけたあとに、ゆっくりとした優しい口調で言葉を紡いだ。

「知り合いに、似てたから」その後すぐに、くるりと僕に背をむけ甘い香りを撒き散らしながら去っていった。

僕はその姿を、煙草に火をつけるのも忘れて見送った。

なんだか、煙草を吸う気にならない。

英語のロゴが印刷されている洒落た箱に、煙草をなおす。そして、冷たい空気を肺いっぱい吸い込んだ。

「あつれー？ 彼方^{かなた}じゃない？ マジ久しぶりじゃーん！」

女性独特の甲高い声を上げて、冬だと言うのに露出度の高い服を着た女が僕の首に指を這わした。突然、僕の胸に飛び込んできたかと思えば、急所の首筋に噛みつくこうとする。人通りの少ない路地とはいえ、人の目が気になった。

初めから黒なんて無かったかのように脱色された髪に、真っ赤な口紅で縁取られた唇。睫毛には小さな宝石のようなものが散らばっていた。瞬きをする度に、音を立てそうなほど睫毛は太く、一本一

本が力強く上を向いていた。

元はきつと、……いや絶対悪くないのに、歳の割りには厚化粧と
いうか、年齢が随分、老けて見える。

「……うん、久しぶり」

這わされた手なるべく自然に見えるように離してから、さつき
なおしたばかりの煙草を取り出し、火をつけた。煙を思い切り吸い
込んで、肺に送り込む。

必要以上に喋りたくなくて、煙草を口に銜える。ニコチンを多く
含んだ煙を吸い込んで、時間をかけて吐き出す。煙によって僕の肺
は汚されていく。

「今日、家に来ない？ 久しぶりにさあ」

……僕はこの女と夜を共にしたことがあった、のかな。

羽のように散って行く煙草の煙を見つめながら、僕は視線を地面
に落とす。なぜか、女を直視することが躊躇われた。

何も無い生活に、刺激を求めていた僕は昔、“彼方”と言う源氏
名を使つてホストのバイトをやっていた。僕を彼方と呼んでいるか
らきつと、そのころの客だったんだろう。

つまらない生活から抜け出すために、たどり着いた夜の歓楽街は、
僕が思っていた以上に面倒で、美しかった。

僕の心のどこかに開いた穴は、風通りが良く僕の心をすっかりと
冷たくさせた。最近は、感情が麻痺してしまうほど冷えてしまつて
いる。

「今日は、どこかに行く用事があるの？」

推測するに女は十代後半から、二十代前半くらいだと思われる。
化粧をしているせいで年齢を特定することが出来ない。

いちいち、抱いた女の名前と年齢を覚えているなんて、僕の足り

ない頭じゃ到底無理なこと。 それに、そんな面倒なことやりたくない。

「……別に、無いけど」

ため息と同時に言葉が零れた。僕がそう答えると、女は満足そうに微笑つて「じゃ、行こつ！」と僕の腕に自分の細い腕を絡めた。女は自分の話を息をする暇も無いくらい話し続けた。ホストを数ヶ月やっていただけあって、タイミングを外さないように相槌を打つことくらいは出来るし、妙に観察力が鋭くなった気もする。

精一杯の寂しさを言葉を使つて、表現している彼女を僕はうざつたく思う反面、羨ましく思った。僕にはそんなことなんて、出来なかったから。

幼いころから、感情を表に出すことなんて許されない環境にあつたし、喜怒哀楽の感情を持つことなんて、あまり無かつた気がした。

寂しい人から、金を取るのは悪いことなんだろうか。

ホストをしていた頃、心の中に沸いた疑問。歓楽街へ、癒しを求めてやってくる女たちはみんな……寂しい人だった。

「その辺の男、引っ掛けて連れてくるつもりだったからさ。部屋、結構片付いているっしょ？」

居間のある部屋のドアを開けて、彼女は僕の方を振り向いた。僕は適当に相槌を打つ。彼女にとって、これが片付いていると言っただろう。

テーブルの上に、適当に置かれた開きっぱなしの雑誌。飲みかけのコーヒーが入った、ハートが付いたマグカップ。化粧台は、あけっぱなしでファンデーションやら、口紅やらが溢れていた。

「適当に、座つてよ。コーヒー位は、出すからさ」

そういつて、手際よく彼女は暖房にスイッチを入れた。暖房の起

動音が、僕の耳に届いて思わず僕は、暖房の前へ手をあてる。殺風景な自分の部屋とは違って、彼女の部屋は物が溢れかえっていた。

「何やってんの」と微笑しながら、女は僕にさっき淹れていたコーヒーを差し出した。

砂糖をスティックの半分入れて、可愛らしい金の小さなスプーンでかき混ぜる。僕の様子を見て、女は笑っていた。

「何で、笑ってるの？」

いきなり僕が自分から口をきいたせいか、彼女は驚いたように目を見開いて、数回瞬きをしてから微笑んで答える。

「彼方が可愛いから」

僕はよく女性に可愛いと言われるけど、それは褒め言葉じゃない。どちらかというと、褒めの部類じゃなくて、貶しの部類に入る。女性は可愛い、男性は格好良い。そういうものじゃ、ないんだろうか。……まあ、どうでもいいけど。

「……そう」

コーヒークップを口に運んだ。コーヒーが喉を潤していく。ほろ苦いコーヒーの味と、香りがゆっくりと僕にしみこんでいく気がした。

女は僕の髪に手を伸ばす。細くて長い、女の指が僕の髪の毛に絡まる。

「染めないの？ 真っ黒じゃん」

自分の髪と比べるように、女は僕の髪を見つめながら言う。僕はその様子をじっと見つめていた。いい加減に、彼女の名前を思い出さないとやばいな、と感じていた僕は、部屋の中で手がかりになるものが無いか、彼女に悟られないように視線で探した。

「染めない。これから、特に染める予定も無い」

相変わらず素っ気無いなあ、と彼女は苦笑して僕の髪から手を離

した。やっと開放された髪にそつと触れる。コーヒー豆を噛んだよ
うな、苦味が口の中いっぱいに広がった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9778c/>

僕は、君を____

2011年1月19日15時55分発行